

キリストを土台とする神殿としての教会

「私はパウロに」「私はアポロに」と、互いに党派に分かれて相争い、教会の本質を見失っていたコリントの信徒たちに、使徒パウロは「神の畑」というたとえに引き続いて「神の建物」すなわち「神殿」のたとえをもって信徒の集いとしての教会の何たるかを次のように教える。

「なぜなら、すでにすえられている土台以外のものをすえることはだれにもできない。そして、この土台はイエス・キリストである。・・・あなたがたは（キリストを土台とする）神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。・・・神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのである」（3：11、16～17／口語訳、エフェソ2：20～22、第1コリント6：19～20も参照）。

ここで「神の宮」（新共同訳はで神殿）と訳されている原語はナオスで、これは神殿全域（ヒエロン）のことでなく、とくに聖なる神の臨在の場所としての本殿、すなわち「至聖所」を表わす語である。旧約時代、神は神殿をご自分の臨在の場所として選ばれ、イスラエルの民にご自身を現わしたが、特に至聖所は、年に一度、大贖罪日と呼ばれる日に、大祭司しか入ることが許されなかった最も聖なる臨在の場所であった。

使徒パウロは新約の民であるキリスト者の集合体としての教会にこの言葉が適用する。すなわち、神は、今や、人間の手によって造られた旧約の神殿のような建物ではなく、信ずる私たち（＝教会）をご自身の神殿として住み給う、と宣言する。

これは驚くべき教えである。私たちが週ごとに集まるどころ、いや、この私たち自身をご自分の住まいとして臨在され、ご自身を私たちに現わし、私たちに祝福して下さい！ この事実は、新約時代の神の民すなわち教会に与えられた最大の恵みのひとつである。

救い主キリストによって罪あがなわれた者の集まりである教会には、そういう「神の宮＝神殿」として聖であるという客観的な意味での聖性がある。つまり教会は単なる人間の集団ではなく、聖なる神の住まいなのである（エフェソ2：20～22参照）。なんと厳かなことであろうか。

たとえ教会が小さく、貧しく、名もない少数の者たちの集まりであるとしても、また弱さや過ちをまぬかれない者の集まりであるとしても、それでもなお神は、これをご自身の「神殿」と宣言されるのである。キリストが土台であり中心であるこの神の宮＝神殿としての教会を「私はパウロに」「私はアポロに」「わたしはペトロに」と、人間を頭とする分派主義の集まりに変えてはいけぬ、と使徒パウロは言うのである。

この気高い教えは、神が聖とされた教会を、たとい問題や欠けがあったとしても、軽々しく考えたり、不真面目に取り扱ったりしてはいけないこと、律法主義的に他の兄弟をさばいたり、あるいは破壊的な批判に走って教会を分裂させるようなことがあってはならないこと、むしろ、聖なる神の聖なる宮の一員とされていることを厳粛な思いをもって受け止め、いつも主のみ前に身を低くし、他の兄弟姉妹とともに主の教会を建て上げていくよう励むこと、このことを私たちに教える。